

魅力ある学校づくり

事業のねらい

すべての児童生徒にとって魅力あふれる学校づくりを目指す

📍「新規不登校の抑制」「居場所づくり、絆づくり」「PDCAサイクル」



実践の進め方

Step 1 児童生徒の実態を把握します
『子どもの声調査』を活用します

子どもの「声」に耳を傾ける

- ア 学校が楽しい
- イ みんなで何かをするのは楽しい
- ウ 授業に主体的に取り組んでいる
- エ 授業がよくわかる

Step 2 「チーム学校プラン」を立てます
※子どもの実態と取組み(目標・内容等)をまとめたもの

取組みの焦点化
共通理解と共通実践

Step 3 「チーム学校プラン」をもとに全職員で実行します
全職員で目標を意識し、取組みを確実に実施します

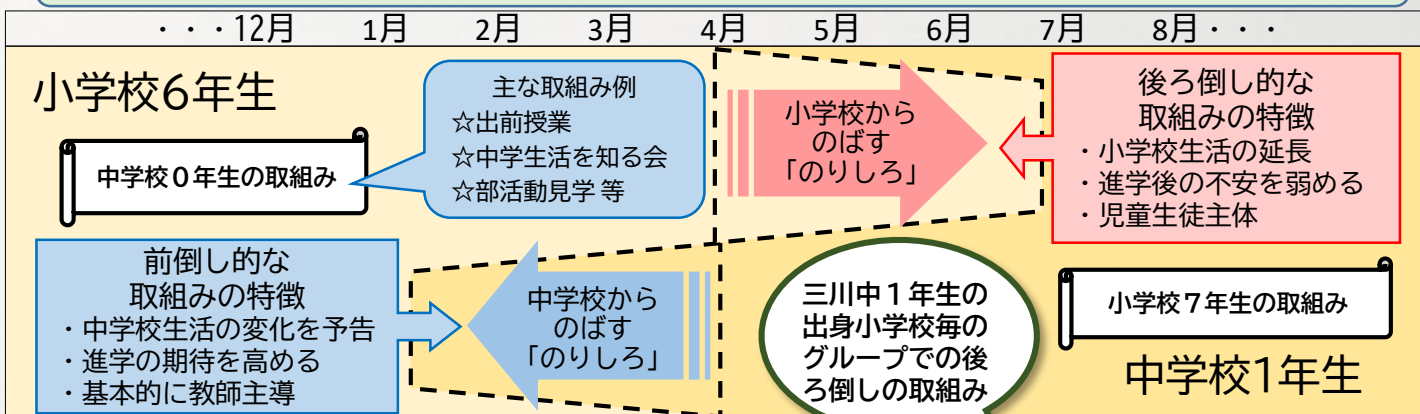
「どんな力を育むのか」を意識する

Step 4 「子どもの声調査」を実施します
取組みを検証し、次につなげます

取組みが子どもたちに届いているかを確かめる

「のりしろづくり」中学校0年生の取組み・小学校7年生の取組み

特に不登校新規数が増加する傾向がある中学校1年生については、「中学校0年生」「小学校7年生」の取組みにより「小中連携」を進化させる



『居場所づくり』と『絆づくり』による集団づくり

『居場所づくり』 主体は教職員

学級や学校をどの児童生徒にとっても安心できる場所にしていく

- 分かりやすい授業
- 自尊感情を育む
- 学習や生活のルール確認
- からかい等に毅然とした態度の指導



『絆づくり』 主体は児童生徒

日々の授業や行事等において、全ての児童生徒が活躍できる場所を実現する

- 児童会、生徒会、学級会など、児童生徒が自ら取り組む活動
- それぞれが役割をもち、力を合わせる活動
- 身近な問題を解決する活動

東郷小の安心できるクラスでの協働的な学び



モデル校区 三川町の主な取組み

目的

- (1) 町学校教育の重点である「学びが楽しい・かかわりが楽しい・また明日行きたくなる学校」の実現を図る。
- (2) 自校や町全体の課題を共有し、各校における実践を通して、小中学校の連携を図るとともに不登校の未然防止および魅力ある学校づくりに取り組む。

三川町共通(三川中・押切小・横山小・東郷小)

- (1) 『子どもの声(4項目) + 町独自追加(2項目)』調査の実施
 - ➔ 子どもの自己肯定感の低さが町の課題にある
 - 自分にはよいところがある
 - 先生は、あなたのよいところを認めてくれる
- (2) 三川町小中学校教職員による『授業改善』に向けた「授業における生徒指導の三機能チェック」アンケートの実施
 - ➔ 『魅力ある学校づくり』の両輪である『行事改善』と『授業改善』のうち、特に『授業改善』に焦点化し、生徒指導の三機能の視点で日常の授業を振り返る
- (3) 三川町魅力ある学校づくり事務局会の開催(5月・7月・12月)
 - ➔ 中学校が窓口となり、『居場所づくり』『絆づくり』の取組み等の協議・情報交換
- (4) 『“のりしろ”(中学校0年生・小学校7年生)の取組み』の実践



不登校未然防止のための各学校の実践



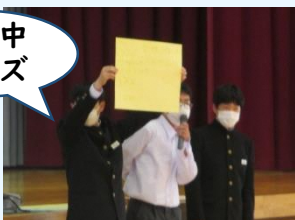
三川中学校

◆「“のりしろ”の取組み」

5月「小中連絡会」の機会を活用し、後ろ倒しの取組みとして出身小学校ごとのアイデアを持ち寄って1年生がグループを作り、出し物を企画して、披露しました。

年度初めの取組みが中1ギャップの解消と不登校の未然防止、そして『絆づくり』の効果を生んでいます。

三川中
クイズ



自分たちで
考えたダンス



◆「友達のいいところ探し」

入力と撮影はタブレットで行い、印刷・掲示します。他者評価により、自己肯定感が高まります。



◆「生徒指導の三機能を生かした授業改善」



生徒指導提要より

生徒指導上の実践上の視点

- (1) 自己存在感の感受
- (2) 共感的な人間関係の育成
- (3) 自己決定の場の提供
- (4) 安全・安心な風土の醸成

魅力事業一年目は『行事改善』、二年目は『授業改善』に力を入れています。11月「生徒指導の三機能を生かした授業研究会」を行いました。加えて、生徒一人ひとりの個性や多様性を認め、授業や学校生活の中で**安全・安心な風土の醸成**を目指して三川中学校では取り組んでいます。

横山小学校

◆「児童会の取組み」

あいさつ運動



運営委員が各教室を回り、あいさつの輪を広げていきます。名人は放送で紹介されます。

得意技自慢



全校の前で得意技を披露し、大きな拍手をもらってうれしそうでした。称賛と認め合いが生まれます。

なかよしデー



上学年のリードで、たてわりのグループで仲良く遊びました。アイデアも上学年が考えました。

東郷小学校

◆「授業における取組み」

2年生 算数



「自分たちで授業を創る」ことを意識して学習しています。

一人一台端末を利用し、グループワークを行い、自分の考えを相手に伝えます。

1年生 生活科



相手意識をもち、「6年生でも分からない学校のひみつをクイズにして教えたい！」というゴールを目指して、グループ毎に話し合いを重ねました。「またやりたい！」と児童たちが達成感を味わうことができました。

押切小学校

◆「友達のよいところ探し」

1年生



学級のためあてに対する振り返りと関連付け、日直の人をほめる“ほめほめタイム”の時間をつくっています。

5年生



専用ポスト“きらりBOX”に友達のよいところを書いて投函し、帰りの会で発表します。

さらに、掲示物で「見える化」する工夫もしました。カードの蓄積に比例し、優しい言動が増えてきました。

協力校区(酒田三中校区)

協力校区の酒田三中学区でも「子どもの声調査」を実施し、児童生徒の視点に立った「チーム学校(学年)プラン」について教職員がワークショップ等の話し合いを行い、授業や行事等に取り組みました。

亀ヶ崎小学校

松原小学校

小学校では、学級毎に「学級遊び」を児童が話し合いで決定して実施したり、縦割り活動の「仲よし班」での活動を日常の清掃活動だけでなく、運動会や6年生を送る会でも行い、異学年の関係が深まる絆づくりを行ったりしました。



酒田第三中学校

中学校では、合唱コンクール、運動会等の学校行事や校則の見直しなどで生徒の「声」を大切にしたい自主的な活動に取り組みました。

2学期の『子どもの声調査』の「あてはまる」の数値を1学期と比較すると、3年生は上がったが、1・2年生が下がったことから、1・2年生の「声」に耳を傾けながら、『居場所づくり』と『絆づくり』の活動を仕組む必要があるという課題が明らかになりました。

小中学校の新規不登校児童生徒発生未然防止のために、この結果を今後の取組みに生かしているところです。協力校区として酒田三中学区の先生方には、庄内ワーキンググループにも積極的に参加していただき、三川中学区とともに「魅力ある学校づくり」に取り組んでいただきました。

酒田市では、中学校区による小中一貫教育を今後さらに推し進めていきます。



庄内教育事務所の主な取組み 庄内ワーキンググループの開催

目的

「学校が楽しい」「みんなで何かをするのは楽しい」「授業に主体的に取り組んでいる」「授業がよくわかる」児童生徒の育成を目指し、「小中連携」についての取組みを交流したり、課題解決に向けて協議したりすることで、魅力ある学校づくりを推進する。

【令和3年度】

講師

第1・3回: 国立教育政策研究所 小野 憲 総括研究官
第2回 : 大阪成蹊短期大学 中野 澄 教授



小野 憲
総括研究官

第1回
7月27日

「児童生徒を主語にした『絆づくり』」

第2回
9月7日

「自信を持ちながら過信を怖れる
『子どもの声調査(意識調査)』の活用方法」

第3回
12月14日

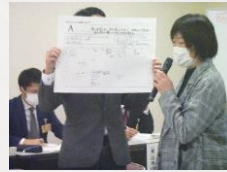
「魅力あふれる小中連携に向けて」



中野 澄 教授

参加者の声

魅力事業の対象は97%の子どもたち。集団を集団としてどのように成長させていくか考えることができました。



【令和4年度】

講師

国立教育政策研究所 高橋 典久 総括研究官

第1回
7月26日

「集団づくりを促進する教師の働きかけ」

第2回
9月8日

・「生徒指導提要の改訂について」
・「生徒指導の機能を活かした授業づくり」

第3回
12月13日

「魅力ある学校を目指した小中接続
～中1ギャップを防ぐ“のりしろ”の取組み～」



高橋 典久 総括研究官



参加者の声

日頃考えていた“教師の問い返し”に内在する生徒指導の三機能とリンクさせ、整理することができました。

「最大の生徒指導は授業」の捉えが感覚的でしたが、それを裏付けする情報をたくさん教えていただきました。



「◎成果」と「◇今後に向けて」

- ◎モデル校区、協力校区による本事業の取組みを通して『行事・授業改善』の意識がさらに高まった。
- ◎子どもの声を基に、教師の見積もり値とのズレを解消する中で、教職員の同僚性が高まった。
- ◎“のりしろ”の取組みの具体を考えることで、校種を越えて『小中接続』と生徒指導力の向上が図られた。
- ◎ワーキンググループ開催により、管内だけでなく県内への事業の趣旨・効果の浸透及び実践の共有が図られた。
- ◇不登校の子どもが「なぜ学校へ来ないのか」という考えを、休まず学校に来る子どもは「なぜ学校に来るのか」という発想の転換の基、集団指導による新規不登校の抑制を目指していく。
- ◇本事業の『居場所づくり』、『絆づくり』、『“のりしろ”の取組み』を継承し、各校の実践を今後も共有していく。

